

地球時代の選択肢

南アフリカに移住した家族

舌村 稔・舌村 暎子 (南アフリカ・ダーバン在住)



第 63 回

私は基本的に人を信じたい

私は基本的に人を疑いません。え？と思うような人でも、その人が私に何かを告げたら、う～ん、と思っても、その人の言葉を信じるようにしています。

で、大体はそれで問題なしなのですが、今までに数回いろいろな詐欺にあって、実際に結構な金銭的被害を受けたり、人間関係を壊されたりしてエライ目にあったこともあります。

ただ、“被害者”となっても、私はその詐欺を支える“嘘”の発端は何なのか、ということに興味をひかれます。詐欺自体にあったことは自慢にもならないけど、あまり長く落ち込まないことは自分ながら恵まれた性格だと思っています。

今回、私が幾度となく話題にしてきたスタッフの一人が私に嘘をついていました。彼女は双子の赤ちゃんは産んでいなかったのです。

彼女がみんなに「妊娠しました、双子です！」と報告したのは9月の始め。皆で驚愕しました。だって、本当に華奢な体つきの彼女が妊娠していたことさえその時初めて分かったからでした。

その時、パートナーからのDVも吐露し全員が彼女を支援する決意をしました。警察にも行かせ、裁判所にも手続きを取ってもらい、彼女は新しい場所へ移動し、7歳の息子との生活を始めた、と思っていたのです。

産休に入って10日目に赤ちゃんが生まれました。

「双子です！」と二人の赤ちゃんの写真が送られてきました。

しかし、皆がそれとなく同じ時期に違和感を抱き始めたのです。

「お祝いを持っていきたい」って連絡しても返事がない。

赤ちゃんの写真がぼやけたものしかこない。

そして、物事が動き始めたのは、私が娘に勧められて購入した双子の赤ちゃんの授乳用の枕でした。

「こんな大きいもの、どうやって運ぶの？」

ということで、彼女に連絡し待ち合わせをしたのです。スタッフの2人も一緒についてきました。みんなが「何かがおかしい」という不安を持ち合わせていたからです。



彼女は待ち合わせの場所に時間通りに来ませんでした。電話をしても出ない、メッセージが既読にならない。約30分車中で待ったが連絡が取れない、これは帰るしかない、という結論に達し車のエンジンを入れたところで、彼女と彼女の従妹が赤ちゃんを連れて前方から歩いてきました。まるで偶然のように。

とにかく一息入れよう、ということで近所のお店でそれぞれが飲み物を注文し、彼女に質問したところ、「内務省の出張所について双子の出生証明書をもたらしてきました」とのことです。

全員を車に乗せて、彼女の新しい「部屋」へと向かいました。途中で、ふと思い立って、「あなたの部屋のある場所は私の車は入れる？」と聞きました。彼女は即刻、「家の前の道は狭くて舗装もないから無理です」と答えたのです。

そこで、近所に住むもう一人のスタッフを途中から乗せて、その地域に向かいました。が、彼女の道順の教え方がいかにも不自然でまるで新しい場所に行くようだったのです。

「車を止めてください」と突然彼女。「この先は道が狭くて車が通れません」え？こんな広い道なのに？とは思いつつ、車をUターンさせて彼女とこの庭師のスタッフを下ろしました。

彼女と彼女の従妹と赤ちゃんたち、そして荷物運びの庭師のスタッフを下ろした途端、一緒に車に乗っていた他のスタッフが、「何かが徹底的におかしい！」と叫びました。

確かに、「何か」合わない。欠けているのです。

私はその時、今日彼女が取ってきた、という出生証明書を確認していないことに気が付きました。

「後で出生証明書を送ってもらうから、それですべてはっきりすると思う」

さて、その晩、彼女が送ってきたのは一通の出生証明書でした。

「もう一通は？」と尋ねる私の質問から約 15 分後に鉛筆で数字を書き直したものが送られてきました。

「これはフェイクでしょう？なんでこんなことをするの？今日一緒にいた赤ちゃんの一人はあなたの生んだ赤ちゃんではないのね」

ある意味、これは「詐欺」なのかもしれません。スタッフも家族も彼女を非難し、警察に届けるべきだ、と激怒していたのです。でも、私は彼女と彼女のパートナーを知っているのです、この話には裏があるのでは？と最初から思っていました。だから不思議と怒りの感情はありませんでした。

このことを記録しておこう、と思ったのは、これがアフリカ限定のことだとは思っていないからです。いわゆる、“詐欺”行為の巧みさ、下手さ、などはあったとしても、彼女のしたこととはどこにでも起こりうると思いました。

ここからは時系列に沿って事実や背景を書いていきましょう。

事実：

- ①パートナーからのDVはあった。
- ②双子である可能性は最初の超音波で指摘されていた。
- ③産休に入った翌日の検診で双子ではないことを知った。
- ④私を含めた周囲には双子ではないことを伏せていた。
- ⑤10月8日、男児を一人出産。が、皆には双子を出産した、と報告。
- ⑥双子が生まれたことを届けるため二通の出生証明を求められたため、公文書を偽造した。

+++++

これが発覚しても、私はただただ、どうして彼女がこんなに簡単にばれる嘘をつき続けたのだろう、ということが気になっていました。

出産した直後から、彼女の送ってくる写真には不自然なものが多かったし、私が購入した双子の授乳用クッションを届けるときも待ち合わせに 30 分も遅れてきたり、家の前まで車を運転させなかったり。何か欠けていたのです。それが何か？何が彼女にこんなことをさせたのか、が分かりませんでした。

先週の土曜日の午後、彼女、彼女の元パートナー（彼女も彼の同席に同意）、そして彼女の育ての親である叔母と私たち会社の関係者 3 名が会って話し合いに臨みました。彼女の元パートナーにも同席させたのは、本当に DV の事実があったかどうか、の確認が必要だったからでした。

事件の原因：

この企みは双子を妊娠している可能性がある、と医者に言われたことで、彼女の叔母が政府支給の子ども手当 2 人分が欲しくて及んだことだった。この叔母は両親を早くに亡くしている彼女の育ての親。彼女の命令には逆らえなかった。これまでも彼女は子ども手当を横取りしていた。

背景：

①アフリカの文化的特徴として、自分よりも年上の親戚に逆らうことはなかなかできない。まして、実質的に育ての親である叔母の指示に逆らうことは不可能に近い。

②彼女には、同じパートナーとの子どもであるてんかんの症状の出る 7 歳の子どもがいる。パートナーの DV により別の居場所が必要だった彼女は叔母の元に戻った。彼女は自分の勤務中に万が一子どもにてんかんの発作が起きたとき、処置方を知らない第三者に子どもを預けることに大きな不安があった。だから、叔母さんの「言うことを聞かねば追い出す」という脅しを受け入れざるを得なかった。

この背景を話してもらうためには、彼女の意思で元パートナーと叔母さんに一時退席してもらい、ようやく重い口を開いてくれたのです。どれだけ本当のことが言いたかったんだろう、と胸が切なくなりました。

そして、事実を全部知らない前に結論を出さずに良かった、とつくづく思いました。残念なことですが、この叔母には、公文書偽造や子ども手当を不当に搾取することが刑罰に値する犯罪であることへの認識がありませんでした。税金で運営されている補助金の不正受給。もちろん、先進国にもあることです。

が、残念ながら、自分もその税金を納めている、という自覚がない個人にとって、公の補助金とは、苦勞なく手に入る「棚ボタ特権」と思っているのでは？と思ひ至りました。

例え、所得税などを払っていなくても、南アフリカで生きていれば付加価値税 15%は誰でも平等です。これだつて立派な税金です。

私は最後まで話を聞いてこういう結論を提示しました。

結論：

- ①叔母さんには金輪際、子ども手当を渡さない。
- ②元パートナーが定額の養育費を払う。
- ③家も叔母さんの家から離れた場所に引っ越し、子どもは新年度から新しい学校に通う。

その後の話し合ひで、彼女は産休が終わつたらこれまで通り仕事に復歸できることになりました。「嘘をつかれた」と烈火のごとく怒っていたスタッフたちも彼女がある面では被害者だつたということも理解してくれました。

彼女自身はもう滂沱の涙での謝罪と自分のしたことへの後悔でボロボロになっていました。

私は超能力者でもなければ、心理学者でもありません。

ただ、私は「言葉」の力を信じています。彼女が産休に入る直前に言つた一言が私を支えてくれました。

「I love my job—私は自分の仕事が大好きです」

そこに嘘はなく、彼女は自分の居場所をしっかりと作り、心の底から彼女の仕事を生きがいにしていたのです。

私は彼女がここまで追い詰められていたことに気づいてあげられなかつたことがなにより悔しかつたし、こういう嘘をつかせようと画策し彼女の叔母への怒りはあります。が、これもある面、途上国の情報伝搬の薄弱性が原因だと思ひています。

ただ何よりも、私はこういった背景を知つたおかげで彼女の謎の行動がようやく分かつて、それを何よりもほつとしているのです。

例の苦勞して探してお届けした双子ちゃん用の枕は、赤ちゃんが一人で喜んで使っているようです。まあ、それはそれで良しとしまししょう。



スタッフと赤ちゃん